

科目名： 経営学特論

担当教員： 井藤 正信(ITO Masanobu)

【授業の紹介】

経営関係の専門書を読むことによって、修士論文の書き方や展開方法を学んでほしい。なお、修士論文のテーマに合わせた専門書を中心に輪読し受講者の複数いる場合は、毎回担当を決めて発表形式で授業を実施したい。

学位授与（ディプロマ・ポリシー）との関連では、留学生の場合は自分の国の企業経営で得た知識を現実の企業等の組織で活用することができる。

【到達目標】

修士論文の書き方を少しでも身につけることができれば、到達目標をクリアしたと言える。なお、修士論文のテーマにそくした指導を行うために、受講者が複数いる場合は目標は個別に設定する。

学生が修士論文の執筆に役立つ知識を習得できる。

学生が企業経営に関する包括的な知識を習得できる。

【授業計画】

学生と話し合っ、計画を作成したい。受講者が複数いる場合は、それぞれの修士論文に合った授業計画を作成する予定である。したがって、計画も受講者ごとに異なる場合もある。なお、基本は次のような計画で進める。

- 第1回 履修者と話し合っ、テキストを決める。発表者も決める。
 - 第2回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第3回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第4回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第5回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第6回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第7回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第8回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第9回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第10回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第11回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第12回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第13回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第14回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
 - 第15回 まとめ。履修者の発表内容について教員が総評を行う。
- 定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

予習としては、与えられたテキストを熟読し、疑問点などを書き留めておいて、講義の時間に質問して経営学の理解を深めるようにしてほしい。また、修士論文のテーマに関係した書物や論文を読んでおくことも大事である。復習としては、講義で学んだ事柄を自分なりに整理し、要点をノートに書き留めておくことが望ましい。なお、質問等については毎週木曜日11時半から12時半までオフィスアワーを設定しているので、活用してもらいたい

【成績の評価】

授業に出席することを前提に、平常点で評価する。平常点80%。発表内容20%。定期試験は実施しない。

【使用テキスト】

修士論文の執筆に参考となるテキストの利用を考えている。その際も履修者と話し合っ、決める。

【参考文献】

特になし。

科目名： 経営史特論

担当教員： 植木 英治(Ueki Eiji)

【授業の紹介】

企業経営の長期的展望は、企業活動を、経済・技術・文化等々の背景と経営戦略との関連で、現在の立場から歴史的・発展的に捉えることによって得られる。この観点から、まず理論的視点を経営史学の歴史を考察することから獲得し、続いてそれを用いて近世ヨーロッパにおける資本主義企業経営の生成とその後の発展、および近代アメリカにおける「現代企業」の出現とその後の発展を考察し、さらに日本における近代企業の成立と展開を、さまざまな事例から考究することによって、企業盛衰の歴史の一般的特色と傾向を捉え、これらの研究を通じて企業経営の今後の展開を国際的な歴史の視点で展望する。この授業は、修士（経営学）の授与に必要な経営学の専門的な知識を修得し、高度な経営課題に応えられる能力を身につけるように構成されている。

【到達目標】

中世から近世にかけてヨーロッパに近代企業の原初形態が出現し、その後資本主義経済の生成と共に新しい企業形態に発展してきた。ヨーロッパ、アメリカ、日本における資本主義企業の生成と発展の過程を分析することによって、欧米日における企業が、それぞれどのような経済社会的背景から登場し、その活動は当時の社会や人々の生活にどのような意義や影響を持っていたかが理解できるようになる。

近年、欧米日の資本主義企業が、それぞれどのような経済的・技術的・文化的背景の中で、株式会社の形態を採用するようになり、さらにそれがなぜ階層的に組織された専門経営者達によって経営されるようになり、また製造や販売など複数の機能部門を持つ、巨大で複雑な組織体いわゆる「現代企業」と呼ばれる特徴を持つ企業へと発展してきたかを理解できるようになる。

上記の考察を通じて得られた知見をもとに、今後、多角化し、グローバル化した巨大企業が、どのような経営を行うことによって、国内外の企業の様々なステイクホルダーに貢献しつつ、国際社会の中で共に成長して行くかを展望できるようになる。

等々を目標としている。

【授業計画】

- | | |
|------|---------------------------------|
| 第1回 | 経営史学の研究課題と研究方法 |
| 第2回 | アメリカ経営史学の生成（N.S.B. グラス） |
| 第3回 | 企業者史の生誕（J. A. シュンペーター、A.H. コール） |
| 第4回 | A.D. チャンドラーJr.の経営史学 |
| 第5回 | 中世ヨーロッパにおける企業経営 |
| 第6回 | 近代ヨーロッパにおける資本主義企業経営の生成 |
| 第7回 | 現代ヨーロッパにおける資本主義企業経営の発展 |
| 第8回 | アメリカ経営史1（三地域の市場形成と交通インフラ整備） |
| 第9回 | アメリカ経営史2（新産業の出現と近代的流通企業の台頭） |
| 第10回 | アメリカ経営史3（企業合同と経営組織の発達） |
| 第11回 | アメリカ経営史4（コングロマリットとネットワーク企業） |
| 第12回 | 日本経営史1（殖産興業政策と官業払下げ） |
| 第13回 | 日本経営史2（財閥の興隆と解体） |
| 第14回 | 日本経営史3（日本的経営の確立と変容） |
| 第15回 | 日本経営史4（グローバル化とCSR要求） |

定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

上記の研究テーマについて、学生は各自それぞれ割り振られた発表課題を授業で発表・討議するために、文献やインターネット等を通じて3種類以上調査・分析し、それらをレジュメ（A4で3枚）として作成しなければならない。また、授業を補足するために、別に3つレポートを指示するので、それら（A4各3枚程度）を作成して提出をしなければならない。さらに、最終的に総括としての課題を与えるので、そのレポート（A4で3枚）の作成と提出が必要である。レジュメとレポートは、すべて受容されるまで訂正が要求される。

【成績の評価】

発表課題のレジュメの内容(70%)、その発表に対する質疑応答(10%)、3つの課題レポート(15%)、および最後に提出が求められる総括課題レポートの内容(5%)等により評価する。各レジュメおよびレポート等に対する評価コメントは、その都度学生に直接伝えてフィードバックする。

【使用テキスト】

下記の文献から、討議箇所を適宜指示する。

米川伸一編	『経営史』	有斐閣、	1977年。
小林袈裟治他編	『西洋経営史を学ぶ(上)』	有斐閣、	1982年。
小林袈裟治他編	『西洋経営史を学ぶ(下)』	有斐閣、	1982年。
経営史学会編	『日本経営史の基礎知識』	有斐閣、	2004年。
経営史学会編	『外国経営史の基礎知識』	有斐閣、	2005年。
F. アマトリー他著	『ビジネス・ヒストリー』	ミネルヴァ書房、	2014年。
経営史学会編	『経営史学の50年』	日本経済評論社、	2015年。

上記以外の文献については、授業でその都度指示する。

【参考文献】

必要に応じて随時紹介するが、下記の文献も参考文献として掲げておく。

P. スクラントン他著 『経営史の再構築』 蒼天社出版、 2017年。

科目名： ベンチャー企業経営特論
担当教員： 正岡 利朗(MASAOKA Toshiro)

【授業の紹介】

我が国において、ベンチャー企業は、広く「スタートアップ」や「スモールビジネス」を含む概念と考えられています。本講義では、まず、ベンチャー企業についてのイメージを深めた上で、よく見られる組織形態を説明し、続いて、ベンチャー企業存続の要諦たるビジネスアイデアと資金調達に言及します。そして、ベンチャー企業が陥りやすい経営危機について解説を行います。これにより、学位授与の方針のうち、「1. 経営学に関連する優れた専門知識」の修得をめざします。

【到達目標】

1. 経営学の研究を遂行する上で、身につけておきたいベンチャー企業についての各種の情報を整理して理解することができる。
2. 理論と実証の両方をバランスよく身につけられるようになる。
3. さらに、将来自ら起業をしたり、ベンチャー企業に関わることを積極的に志向する場合は、より実践的な知識や考え方を身につけられるようになる。

【授業計画】

- 第1回 ガイダンス
 - 第2回 ベンチャー企業とは（総論）
 - 第3回 同 上（さまざまな活躍分野）
 - 第4回 ベンチャー企業の組織形態（総論）
 - 第5回 同 上（さまざまな組織形態）
 - 第6回 ベンチャー企業とビジネスアイデア（総論）
 - 第7回 同 上（ビジネスアイデアの管理）
 - 第8回 同 上（ビジネスアイデアの活用）
 - 第9回 ベンチャー企業の資金調達（総論）
 - 第10回 同 上（さまざまな助成金）
 - 第11回 同 上（助成金の活用）
 - 第12回 ベンチャー企業の経営危機（総論）
 - 第13回 同 上（組織崩壊など）
 - 第14回 同 上（風評被害など）
 - 第15回 これまでの授業のまとめ（学習した重点項目の確認）と質疑応答
- 定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

よいレポート内容をまとめるには、相当な時間外の学習が必須となります。さまざまな意見を総合して、自分の意見をまとめるための参考にするという態度を、時間をかけてぜひ身につけてください。毎回の授業開始前には、プリント等を復習し、疑問点、気づいたことをメモ等にまとめておいてください（2時間）。また、毎回の授業毎にA4・1枚程度の内容要約を行って記録しておいてください（2時間）。オフィスアワーを設定しているので、掲示等で日時を確認の上、質問に来てください。

【成績の評価】

レポート提出（100％）の結果により判断します。ただし、授業態度が不適切な場合はそれに応じた減点をしますので留意してください。なお、各受講生のレポートの結果については講評し、フィードバックを行います。

【使用テキスト】

とくにありません（インターネットを使用する場合もある）。

【参考文献】

読売新聞大阪本社『ふるさと再生 カギは四国にあり』中央公論新社、2016年。（¥1,620）

科目名： 経営組織特論
担当教員： 松岡 久美(MATSUOKA Kumi)

【授業の紹介】

組織マネジメントとは、目標に向け、組織を効果的に動かすことである。組織を効果的に動かすためには、その構成要素となるひと、集団、そして組織そのものがもつ特性について知り、それらを踏まえた上での対策をとる必要がある。

この授業では、テキストや最新のジャーナル論文を輪読しながら、組織マネジメントにおける研究上、理論上、実務上の課題について検討し、経営学に関する知識、技法、態度を修得する。授業は基本として演習形式で進める。

【到達目標】

1. 組織のマネジメントに関する諸理論を適切に説明することができる。
2. 組織のマネジメントにおける研究上、理論上、実務上の課題について自分の言葉で説明することができる。

【授業計画】

第1回	イントロダクション	
第2回	個人行動の基礎	
第3回	モチベーション	理論編
第4回	モチベーション	実践編
第5回	集団行動の基礎	
第6回	意思決定	
第7回	リーダーシップ	理論編
第8回	リーダーシップ	実践編
第9回	コンフリクトと交渉	
第10回	組織デザイン	理論編
第11回	組織デザイン	実践編
第12回	組織文化	
第13回	組織変革	
第14回	応用論文	リーダーシップ
第15回	応用論文	組織変革
定期試験は実施しない		

【授業時間外の学習】

テキストおよび配布資料についての予習・復習が必要である。2～3時間を要する。
上記に加えて、報告担当者はプレゼン用の資料（またはレジュメ）を準備すること。

【成績の評価】

報告の内容（25%）、討議への貢献度（25%）、および、期末レポート（50%）によって総合的に判断する。

期末レポートについては、予め採点基準を説明する。また、提出後に個別にフィードバックを行う。

【使用テキスト】

スティーブン P. ロビンズ著（高木晴夫訳）『組織行動のマネジメント』ダイヤモンド社，2009年（2800円＋税）。

上記以外に使用する資料については配布する。

【参考文献】

その都度紹介する。

科目名： 経営戦略特論

担当教員： 岡本 丈彦(OKAMOTO Takehiko)

【授業の紹介】

経営戦略特論は、第一義的には企業が全体として長期的に発展するための方策の研究を目指している。企業がゼロ利潤条件を回避し、長期的に利益を獲得するためにはどのような方法が必要であるのか、を明らかにしている理論の1つに、ダイナミック・ケイパビリティ論が存在する。本講義においては、このダイナミック・ケイパビリティに焦点を当てて、その特徴を明らかにするとともに、これまでの戦略論との違いを検討する。その上で、ダイナミック・ケイパビリティが最も重要となる多国籍企業との関係を考察し、企業の経済発展にダイナミック・ケイパビリティがどのように寄与するのかについて議論を行う。

本講義は、ディプロマポリシーの「経営学に関連する優れた専門知識を身に付けている人」の育成を目的とする。

【到達目標】

本講義においては、経営戦略論の中でも様々な学会において活発に議論が行われているダイナミック・ケイパビリティについて理解を深めることで、以下のような能力の獲得を到達目標とする。

現実の企業の問題を理論において説明することができること。

多国籍企業とダイナミック・ケイパビリティの関係を理解することができること。

ダイナミック・ケイパビリティが無かった場合にはどのような問題が起きるのかを、理解することができること。

【授業計画】

- | | | |
|------|---|------------------|
| 第1回 | イントロダクション（講義の概要、課題レポートの書き方、成績評価の仕方） | |
| 第2回 | 企業の(持続可能な)パフォーマンスとミクロ的基礎 | - ケイパビリティの性質 - |
| 第3回 | 企業の(持続可能な)パフォーマンスとミクロ的基礎 | - ミクロ的基礎を中心として - |
| 第4回 | 発達した市場経済における経営者の(企業家的)機能 | |
| 第5回 | 企業がゼロ利潤条件を回避する方法と課題 | |
| 第6回 | ダイナミック・ケイパビリティの基礎 | |
| 第7回 | 資源、ケイパビリティ、ペンローズ効果 | |
| 第8回 | ダイナミック・ケイパビリティと多国籍企業の本質 | —多国籍企業の本質— |
| 第9回 | ダイナミック・ケイパビリティと多国籍企業の本質 | —多国籍企業論への挑戦— |
| 第10回 | 知識・ケイパビリティに基づく価値獲得 | |
| 第11回 | 経営者・企業・技術の役割 | |
| 第12回 | 経済発展における経営者・企業化・文系人材の役割 | |
| 第13回 | 急速な技術変化の体制下における競争の性質 | |
| 第14回 | 進化経済学と行動経済学の諸相 | |
| 第15回 | サマリー（レジュメの修正確認、各課題レポートの完了確認、最終総括レポート課題） | |
- 定期試験なし

【授業時間外の学習】

本講義ではパワーポイントによる報告が必要になる。1回の講義に際しては、テキストを熟読したうえで、疑問点等を文献やインターネットで調べた上でスライドを16枚作成し、報告に臨むこと。その際には、第1回の講義で説明するスライドの作成方法を厳守すること。

【成績の評価】

レジュメの内容・その報告に対する質疑応答(50%)、および最後に提出が求められる総括レポート(50%)の内容などを総合して評価を行う。

レジュメ及び報告内容の評価については、授業時間内に説明するとともに、レポートについては成績確定後に、フィードバックを行う。

【使用テキスト】

デビッド・J・ティース著/谷口和弘/蜂巢旭/川西明宏/ステラ・S・チェン訳 [2013], 『ダイナミック・ケイパビリティ戦略 - イノベーションを創発し、成長を加速させる力 - 』ダイヤモンド社。

【参考文献】

必要に応じて随時指示する。

科目名： 人的資源管理特論
担当教員： 井藤 正信(ITO Masanobu)

【授業の紹介】

テキストを履修者と決める場合は、それに沿ってレジメを用意し、発表を行って議論する。具体的には、日本の人事・労務管理について書かれたテキストを使用する予定だが、留学生が多いので、当該学生の国の人事・労務管理の状況について書かれたテキストを輪読し、発表者を決めて報告させ、それについてディスカッションをする。

学位授与（ディプロマ・ポリシー）との関連では、留学生の場合は自分の国の人事・労務管理で得た知識を現実の企業等の組織で活用することができる。

【到達目標】

学生が人事・労務管理の知識を習得できる。
学生が人事・労務管理で獲得した知見を社会で活用できる。

【授業計画】

履修者と話し合って授業計画を練りたいが、おおむね次のような授業計画を予定している。

第1回 履修者と話し合っ、テキストを決める。発表者も決める。
第2回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第3回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第4回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第5回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第6回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第7回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第8回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第9回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第10回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第11回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第12回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第13回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第14回 発表者が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。
第15回 まとめ。履修者の発表内容について教員が総評を行う。
定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

予習については、2時間ほどかけて労務管理（人的資源管理）関係の専門書をあらかじめ読んでおいてほしい。時間外学習で労使関係についての知識も同時に付けてもらいたい。また、復習については、講義で学んだ内容を自分なりに整理し、ノートに要点を書き留めておくことが望ましい。質問等については毎週木曜日11時半から12時半までオフィスアワーを設定しているので、活用してもらいたい

【成績の評価】

平常点で基本的には評価する。平常点70%。発表内容30%。

【使用テキスト】

履修者と話し合って決める。

【参考文献】

特になし。

科目名： 財務管理特論

担当教員： 井上 信一(INOUE Shin'ichi)

【授業の紹介】

本研究科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに則り、幅広い専門性を備えた優れた職業人の養成を目標にし、そのために必要な経営学領域（コーポレート・ファイナンス）の専門的知識の習得及び実践力の養成を目的にしています。

「金融資本主義」あるいは「信用経済」といわれる時代を迎え、マネーという怪物が世界を闊歩しています。現代の企業活動は、「人、モノ、カネ、情報」から成り立っていますが、この授業では「カネ（ファイナンス）」の面に焦点をあて、コーポレート・ファイナンスの調達と運用について、その理論と技法を理解することを目的にします。同時に企業財務の理論、歴史的発展及び日本企業の資金調達・運用の実態についても明らかにします。経営学特論、リスク・マネジメント特論、会計学特論、管理会計特論、情報関係科目など等との関係も深いので、それらの講義についても幅広い関心と理解があることが望まれます。

【到達目標】

「金融資本主義」における財務管理の理論と実態に関連する専門知識が理解・習得できることを目標とします。講義はできるだけ具体的な事例紹介などを織り込みながら、以下のことが広く理解できるようになることを到達目標とします。

1. 企業経営と財務管理の関係とその意義と重要性を理解できる。
2. 資金調達の意義、方法を理解することができる。
3. 企業価値創造と自己金融の内容について理解できる。
4. 日本企業の財務管理の動向とその特徴について理解できる。
5. 最近の資金調達と運用の理論と方法について理解できる。

【授業計画】

履修生のプレゼンテーションとハンドアウト資料をもとに、できるだけデスカッションを中心に解説などを加え、テーマの内容を深めてゆきたいと思います。

- 第1回 コーポレート・ファイナンスとは？ - インTRODクシヨN
- 第2回 コーポレート・ファイナンスの舞台 - 企業形態と資本集中
- 第3回 株主資本の調達 - 増資の方法、株式の多様化と配当政策
- 第4回 E V Aと機関投資家
- 第5回 自己金融 - 利益の留保と減価償却と長期引当金
- 第6回 社債資本の調達と借入金の調達
- 第7回 経営計画と財務計画
- 第8回 長期資本管理・短期資本管理
- 第9回 現在価値と投資の評価
- 第10回 キャッシュフローと資金の効率化
- 第11回 証券化
- 第12回 デリバティブ
- 第13回 ベンチャービジネスとベンチャーキャピタル
- 第14回 中小企業財務
- 第15回 株主価値経営からC S V経営
(期末レポートを実施します。)

【授業時間外の学習】

テキストの予習と復習には、それぞれ2時間程度をかけることを期待します。同時に、大学の図書館で、日本経済新聞など経済関係の新聞・雑誌、ネット等の経済情報に日々積極的に目をおし、常に理論と実務の関係を考えることが、財務管理、コーポレート・ファイナンスへの理解を深めるために重要です。ファイナンスの世界は、激動の世界ですので、毎日企業のファイナンス情報に接すると共に、常に「なぜ(Why)?」という、アクティブな視点を持ってアプローチすることが肝要です。(なお授業の前後やメールによる質問(オフィスアワー)についても、随時受け付けますので、気軽にご相談ください。)

【成績の評価】

講義へのアクティブなコミットメントとコツコツと自主学習をすることが大切です。成績評価は、クイズ(20%)、報告、討論への参加程度(質、量)(40%)と期末レポート(40%)により評価します。学生へのフィードバックの方法は、課題などは次回授業の始めに返却、解説、コメントをします。またレポートにはコメントをつけて、フィードバックをします。

【使用テキスト】

テキストは使用しません。講義資料を、事前の講義時間に配布します。それをもとに、予習・復習に生かしてください。(なおこの講義のためのノートは必須で、予習・復習と講義に大いに活用してください。)

【参考文献】

教科書に近い参考書として、坂本恒夫編著『テキスト 財務管理 第5版』中央経済社、2015年。
それ以外は、必要に応じて、講義の中で紹介します。また新聞、雑誌、ネットなどの経済・ビジネス・ファイナンス記事に常に目を通すことは重要で、コーポレートファイナンスの理解に大いに参考になります。

科目名： リスクマネジメント特論
担当教員： 安井 敏晃(YASUI Toshiaki)

【授業の紹介】

リスクマネジメントとはそもそも企業を取りまくリスクに対処するために保険を管理する「保険管理」が発展して誕生したものである。

本講義ではそのリスクマネジメントについて解説する。

まず、リスクおよびリスク類概念について説明した後、リスクマネジメントの歴史を学ぶ。

その後、リスクマネジメントの進め方について検討した後、具体的なリスク処理手段について考察する。

本講義では専門的知識として、リスクマネジメントに関連する優れた専門知識の修得を目指している。

【到達目標】

リスクマネジメントについて説明できる。

【授業計画】

- 第1回 危険とは
 - 第2回 リスクについて（リスクについて理解する）
 - 第3回 リスク類概念について（リスク類概念について理解する）
 - 第4回 損失とは
 - 第5回 リスクマネジメントの変遷(1)（1960年代までのリスクマネジメントの歴史について学ぶ）
 - 第6回 リスクマネジメントの変遷(2)（1970年代以降のリスクマネジメントの歴史について学ぶ）
 - 第7回 危機管理とは
 - 第8回 リスクマネジメントプロセス(1)（リスクマネジメントプロセスについて理解する）
 - 第9回 リスクマネジメントプロセス(2)（具体的なリスクマネジメントの進め方について学ぶ）
 - 第10回 リスクコントロール(1)（リスクコントロールの概念について学ぶ）
 - 第11回 リスクコントロール(2)（リスクコントロールの具体的な方法について学ぶ）
 - 第12回 リスクコントロール(3)（リスクコントロールを進める上で特に注意する点について学ぶ）
 - 第13回 リスクファイナンス(1)（リスクファイナンスの概念について学ぶ）
 - 第14回 リスクファイナンス(2)（リスクファイナンスの具体的な方法について学ぶ）
 - 第15回 まとめ：これまでの授業内容のまとめと質疑応答
- 定期試験は実施しない
注意：授業計画を変更することがある。

【授業時間外の学習】

授業の終りに次回講義に関する参考文献・資料を示すので、調べておくこと。
レポート課題に積極的に取り組むこと。

【成績の評価】

講義への取り組み、レポート（2回）等を総合して評価する。

詳細は以下の通りである。

講義への取り組みと講義内の課題（30％）、口頭発表（30％）、レポート課題（40％）

講義内の課題と口頭発表については、授業時に結果を講評しフィードバックを行う。

【使用テキスト】

レジュメを使用数r。

【参考文献】

- 上山道生（2002）『リスクマネジメントの仕組み』（中央経済社）
- 中村昌允（2012）『技術者倫理とリスクマネジメント』（オーム社）
- 森宮康（1986）『リスクマネジメント論』（千倉書房）

科目名： 国際経営特論

担当教員： 岡本 丈彦(OKAMOTO Takehiko)

【授業の紹介】

誰が「企業」を支配するのか、そして社会的な広がりをもつ現代の「企業」、とりわけ巨大な株式会社を誰がどのように規制するのかというコーポレート・ガバナンス(corporate governance, 以下CGと略記)の問題が、各国で活発に議論されており、多発する企業不祥事とあいまって現代社会における焦眉の問題と認識されるようになってきている。また、「企業」がグローバルに活動を展開する際に、進出先の国家やその国の規制当局がどのようなガバナンスについての規制を行っているのかが非常に重要な問題となる。

本講義においては、まず、CGの議論に用いられる新制度派経済学の3つの理論(エージェンシー理論、取引コスト理論、所有権理論)について検討を行う。その上で、CGの議論の契機を明らかにするとともに、1980年代以降台頭してきた機関投資家の行動と彼らの活動について概観する。そして、上述の3つの理論を踏まえた上で、日米独におけるCGの歴史を検討し、日米独のCGの比較検討を行う。

本講義は、ディプロマポリシーの「経営学に関連する優れた専門知識を身に付けている人」の育成を目的とする。

【到達目標】

本講義においては、次の事項を到達目標とする。

コーポレート・ガバナンスの概念を把握することで、現代社会における我々の生活を支える「企業」は、誰がどのように管理しているのか、そして、それを誰が監督しているのかということを理解することができること。

日米独のコーポレート・ガバナンスには、どのような差異があるのかを理解するとともに、そのような違いをもたらす要因に関して、理解を深めることができること。

コーポレート・ガバナンスを議論する際には、どのようなアプローチが存在するのか、そして、そのアプローチを使用することでコーポレート・ガバナンスの問題の本質がどのような問題であるのかを理解することができること。

【授業計画】

- 第1回 イントロダクション(講義目標、講義概要、成績評価の説明)
- 第2回 エージェンシー理論・取引コスト理論・所有権理論の概要
- 第3回 エージェンシー理論における人間の特性と問題
- 第4回 取引コスト理論における人間の特性と問題
- 第5回 所有権理論における人間の特性と問題
- 第6回 企業におけるエージェンシー問題 - 経営者と株主の関係 -
- 第7回 企業不祥事とエージェンシー問題
- 第8回 日米独の企業を対象としたエージェンシー分析
- 第9回 企業における取引コストの問題
- 第10回 日米独の企業を対象とした取引コスト分析
- 第11回 企業における所有権理論の問題
- 第12回 日米独の企業を対象とした所有権理論分析
- 第13回 制約された合理性と企業不祥事
- 第14回 対立構造と企業不祥事
- 第15回 これまでの講義についてのまとめと質疑応答。

定期試験なし

【授業時間外の学習】

第6回の講義以降は、学生にパワーポイントにて報告を行わせるため、必ず、パワーポイントの資料を講義が始まるまで準備しておくこと。

【成績の評価】

講義における発表(60%)、定期レポートおよび受講態度(40%)で評価を行う。

講義における発表については、発表の都度に点数を明示するとともに、定期レポートについては、採点の後、返却を行う。

【使用テキスト】

菊澤研宗 [2004], 『比較コーポレート・ガバナンス論 - 組織の経済学アプローチ - 』有斐閣。

吉田和夫・大橋昭一監修・深山明・海道ノブチカ・廣瀬幹好編 [2010], 『最新・基本経営学用語辞典』 同文館出版。

【参考文献】

必要に応じて随時指示する。

科目名： 経営情報学特論

担当教員： 佃 昌道(TSUKUDA Masamichi)

【授業の紹介】

この授業は30年以上にわたる企業勤務の中で多くの業界においてサプライチェーンシステムを技術営業として販売、あるいはコンサルタントを行う中で経営情報に関する素養を持っている実務家教員が担当している。この授業は経営情報系や事業創造に関する科目であり、特にディプロマポリシーの「経営学に関連する優れた専門知識を身に付けている人」の育成にかかわっている科目である。

情報には技術に関する情報と技能に関する情報がある。たとえば、商品を梱包するという作業の場合は、どのような用紙を使うかという技術に関するものと、きれいに包装するという技能に関するものがある。また、ケーブルを接続する際には、テープを10回巻くといった技術に関する情報と、上手に巻くという技能に関する情報がある。この講義では企業を運営する上で必要になる業務に関する適切な判断をするための技術に関する情報を取り扱い、技能に関するそれは取り扱わない。経営情報とはこのような経営や運営のための各種の判断を行うために必要なデータをさす。多くのデータは商品受注・部品発注・生産・ユーザ対応・経理等の企業運営の中や国際情勢・国内情勢の変化の中で作られる。企業運営では適正な判断をするためのデータを速やかに、必要とする担当者に提供しなければならない。そのため、昔は手作業で行っていたことも、情報システムを活用して人手をかけずに自動的におこなうようにしてきた。たとえば、商品製造のための原材料在庫や商品在庫は極力少なくして在庫資産を削減する・受注した商品は極力早く注文者に届ける・・・等の実現は企業情報システムの活用なしにはありえない。

本講義では企業活動の中で経営情報がどのように活用されているか、ネットワークに接続された情報システム上で経営情報が取り扱われるようになった結果として、ワークフローや組織はどのように変化したが、優れた企業とそうでない企業の差はどこから生じるのかなどを実在する企業の事例を含めて議論する。

【到達目標】

会社を営むもしくは管理運営するためにどのような経営情報が必要かを判断することができる
個別の経営情報が企業運営にどのように影響するかを見極めることができる
どのような経営情報を強化していけばいいかを判断できる
企業として、装備すべき情報システム設計の基本を理解できる

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 会社の公器性、企業の行動原理、本質
- 第3回 各部門に必要な要素、企業情報システムの概要
- 第4回 営業部門業務の受注処理までのフロー
- 第5回 営業部門業務の出荷検収集金までのフロー
- 第6回 購買部門業務の引き合い契約までのフロー
- 第7回 購買部門業務の入荷検品検収までのフロー
- 第8回 製造部門業務の生産計画のフロー
- 第9回 製造部門業務の生産実績収集のフロー
- 第10回 生産管理システムの分析
- 第11回 経営管理業務の資金のフロー
- 第12回 経営管理業務の部材製品のフロー
- 第13回 国際経営の内 海外工場との情報のフロー
- 第14回 国際経営の内 海外取引先との情報のフロー
- 第15回 企業情報システムの今後
(期末テストは行わない)

【授業時間外の学習】

下記の予習や復習には講義ごとに4時間程度の時間を割いてほしい
事前に配布した資料に関しては予習を行い、質問点疑問点を明確にしたうえで授業にのぞむこと
学期中にほぼ毎回ミニ・レポートを課す。講義中のノートを必ず読み返し、レポート作成の参考とすること
レポートは返却する。返却されたレポートを読み直し、再提出を含めて見直すこと

【成績の評価】

毎回の講義での積極性を評価する(30%)、
ミニ・レポート(50%)および期末レポート(20%)により評価する。(期末テストは行わない)
また、提出されたレポートは記述内容の先進性(60%)、講義内容の理解レベル(40%)で評価する
なお、期末レポートを提出しない者、出席が10日に満たない者は不合格とする
また、遅刻もしくは早退2回で欠席1回とする

【使用テキスト】

テキストは特に指示せず、授業ごとに必要な資料をプリントして配布する

【参考文献】

『経営情報論』 遠山 堯 他著 有斐閣アルマ 2008
その他 参考文献・参考図書は授業時に紹介する

科目名： 情報システム特論

担当教員： 山口 直木(YAMAGUCHI Naoki)

【授業の紹介】

情報システムとはどのようなものなのか？どのように使われているのか？どのように開発されているのか？どのように運用されるのか？本講義では、情報システムの開発を通じて、そのような疑問を紐解いていきたいと考えています。

システムとは「機能が異なる複数の要素が密接に関係しあうことで、全体として多くの機能を発揮する集合体」ということなので、その仕組みを理解することは経営学にも役に立つと思います。

学位授与との関連として、「企業や自治体、NPO等の組織で高度な課題に応えられる能力を有する人」の能力を獲得することを目指す。なお、下記の授業計画は目安であって受講生の理解度に合わせて進行状況を変えることがあります。

【到達目標】

- (1) 情報システムの基礎的な知識を理解できる。
 - (2) PMBOKに関する知識を説明できる。
 - (3) 情報システムの設計手法に関する知識を理解できる。
- 以上3点を目標とします。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 情報システム
- 第3回 実際の情報システム
- 第4回 PMBOKの全体像
- 第5回 PMBOKの詳細（スコープ、スケジュール、コスト）
- 第6回 PMBOKの詳細（品質、リスク等）
- 第7回 経学フェーズとは
- 第8回 計画フェーズの作業手順（スコープ、システム化方針等）
- 第9回 計画フェーズの作業手順（WBS、コスト等）
- 第10回 計画フェーズの作業手順（計画書作成、次フェーズ開始等）
- 第11回 要件定義フェーズ
- 第12回 要件定義フェーズの作業手順
- 第13回 設計開発フェーズ
- 第14回 ここまでのまとめと中間試験
- 第15回 中間試験の評価

定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

- (1) google classroomを用いて、授業管理を行うので、必ずインストールをすること。
 - (2) google classroomを通じて、予習・復習のキーワードを提示するので、図書館等で調べておくこと。1時間
 - (3) 予習・復習、レポート等を行う場合には、まず、自ら調べ。その結果を他の学生のレポートと比較するなど、グループワークを意識して行うこと。1.5時間
 - (4) 授業において、疑問に感じたこと、興味を持ったことは研究室に質問に来る、図書館で来ベルなど、自ら学ぶ姿勢を明確にすること。1.5時間
- なお、時間は1回の授業を対象としている。

【成績の評価】

レポート50%、中間試験50%で評価する。

フィードバックとして、レポート、中間試験は採点后、返却・解説する。
また、オフィスアワーを設定しているので利用すること。

【使用テキスト】

プロジェクトマネジメント標準 PMBOK入門：PMBOK 第6版対応版 オーム社 広兼 修（著） 2160円+税

【参考文献】

適宜支持する。

科目名： 経営工学特論
担当教員： 本田 道夫(HONDA Michio)

【授業の紹介】

経営に関する諸問題について、経営工学的アプローチによって問題を解決する方法を学び、そのビジネス分野への応用について理解を深める。経営情報の専門的知識の修得を目標としています。

【到達目標】

企業経営に出くわすようなデータを分析して、経営に関する諸問題を具体的に理解することができ、それを数理的に解決できる力を養う。そのため、比較的簡単なデータを分析することから始めてより複雑なデータを分析できるようにしたい。

【授業計画】

第1回 スケジューリングの考え方
第2回 スケジューリングの実際
第3回 スケジューリングとPERT/CPM
第4回 線形計画問題
第5回 線形計画と生産計画
第6回 線形計画と輸送問題
第7回 線形計画と最適配置問題
第8回 線形計画とその他の問題
第9回 需要予測の手法
第10回 需要予測の例
第11回 在庫管理の考え方
第12回 在庫管理の実際
第13回 経済性計算の考え方
第14回 経済性計算の例
第15回 レポートのまとめ方
定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

授業中に考えた問題と良く似た問題を1題指定する。これを自分で考えてみることに。

【成績の評価】

毎回のレポート（80点）。最終レポート（20点）。
レポートは添削して返却します。

【使用テキスト】

プリントを配布する。

【参考文献】

その都度示す。

科目名： ビジネスシミュレーション特論
担当教員： 浮穴 学慈(UKENA Satoshi)

【授業の紹介】

新規にビジネスモデルを構築したり、既存の市場への新規参入を実施したりするときには、勝算を見積もることが必要ですが、このための有用な手法にビジネスシミュレーションがあります。ビジネスシミュレーションでは、対象とする市場を何らかの数理的なモデルとして表現することで、どのような結果がもたらされるのかを計算します。ビジネスシミュレーションの応用として、現実の人間同士の駆け引きを通じて市場モデルの特性を理解する手法であるビジネスゲームがあります。ビジネスゲームを用いると、その市場において人間同士にどのような相互作用が発生するのかを探ることも可能です。

この授業では、ビジネスゲームの理論的な解析を通じて想定される結末と、実際のゲームの結果が一致するののか否かについて議論を行います。加えて、現実の何らかの市場からゲームとしてのトレードオフ構造を抽出して、ビジネスゲームの市場モデルを設計することに取り組みます。

受講に必要な前提知識として、データ分析の方法を理解していることが挙げられます。事前に、経営学部における統計学関連の様々な授業科目や「スモールビジネス論」における学習内容を復習しておいてください。

学位授与の方針との結び付きとして、特に「企業や自治体、NPO等の組織で高度な課題に応えられる能力」の育成に関わっていると考えています。

【到達目標】

1. 市場のメカニズムを推測し、最大の利益を追求することができる
2. 他社の戦略を推測し、適切な対策を取ることができる
3. 市場の数理モデルを解析して、どのような結末が導かれるのかを理解できる
4. 現実の市場からビジネスゲームの市場モデルを設計することができる

【授業計画】

- 第1回 ガイダンス
 - 第2回 ベーカリーゲーム(1)：リハーサル
 - 第3回 ベーカリーゲーム(2)：ゲームセッション1
 - 第4回 ベーカリーゲーム(3)：ゲームセッション2
 - 第5回 ベーカリーゲーム(4)：発表
 - 第6回 ビジネスゲームの理論的な解析
 - 第7回 ゲームの構造とトレードオフ
 - 第8回 市場モデルの設計(1)：様々な市場の具体例
 - 第9回 市場モデルの設計(2)：市場についての分析
 - 第10回 市場モデルの設計(3)：トレードオフの抽出
 - 第11回 市場モデルの設計(4)：数理モデルの構造の設計
 - 第12回 市場モデルの設計(5)：数理モデルの妥当性の評価
 - 第13回 市場モデルの設計(6)：各種パラメータの調整
 - 第14回 市場モデルの設計(7)：発表
 - 第15回 総括：レポートについての解説
- 定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

以下の標準所要時間は、達成に必要な目安の時間を授業回あたりの時間に換算したものです。

発表の準備(1時間)、レポート課題の作成(1時間)を必要とします。

予習として事前に配布する資料に目を通し、専門用語を拾って意味を調べ、疑問点と合わせてノートに記載すること(1時間)を課し、復習として授業の内容を自分なりにまとめて再構成し、他者への説明ができるようにしておくこと、自分なりの意見をノートに記載すること(1時間)を課します。

解らないことがある場合、研究室に質問に来ればヒントやアドバイスを与えます。オフィスアワーを設定していますので、掲示等で日時を参照してください。

【成績の評価】

授業における質疑応答と議論への貢献(20%)、授業内の課題(20%)、プレゼンテーション(20%)、レポート課題(40%)

授業内の課題やプレゼンテーションについてのフィードバックは、その授業のなかで行います。また、レポート課題のフィードバックは、後日、研究室において課題の評価の詳細について説明します。

【使用テキスト】

資料を配布する。

【参考文献】

中山幹夫「社会的ゲームの理論入門」（勁草書房）ISBN978-4-326-50267-7，¥3,024．

藤田勝康「ExcelによるOR演習」（日科技連）ISBN978-4-8171-5033-2，¥2,376．

笠井清志「コンビニのしくみ」（同文館出版）ISBN978-4495577018，¥1,728．

大久保一彦「成功する小さな飲食店の始め方」（西東社）ISBN978-4791613816，¥1,404．

科目名： 会計学特論

担当教員： 井原 理代(IHARA Michiyo)

【授業の紹介】

近年、会計をめぐる環境は大きく変化しており、わが国の会計制度は非常に難しい局面を迎えているといわれる。現代社会において会計が果たす役割を考察するとともに、わが国の会計をとりまく現状について、国際財務報告基準（IFRS）などとの比較に基づき理解を深め、わが国の会計の理論と制度の方向性を探りたい。

【到達目標】

大きく変化する会計の理論と制度の現状を的確に捉え、今後の方向性を理解して、いわば「生きている会計」を修得する。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 会計の役割 その基本思考
- 第3回 会計の役割 その変貌
- 第4回 複式簿記の計算構造
- 第5回 静的貸借対照表論の論理
- 第6回 動的貸借対照表論の論理
- 第7回 資金会計論の計算構造
- 第8回 資産負債アプローチ その論理
- 第9回 資産負債アプローチ 包括利益思考
- 第10回 収益費用アプローチ その論理
- 第11回 収益費用アプローチ 純利益思考
- 第12回 原価主義会計
- 第13回 公正価値会計
- 第14回 IAS・IFRS
- 第15回 わが国における今後の動向

【授業時間外の学習】

テキストや事前に配布した資料等から次回授業の範囲を提示するので、その予習を前提とする。

【成績の評価】

授業への貢献状況とレポート内容による。

【使用テキスト】

北村敬子等責任編集『企業会計の計算構造（体系現代会計学第2巻）』中央経済社を中心に、適宜資料を追加する。

【参考文献】

授業の進捗に応じて適宜指示する。

科目名： 財務会計特論

担当教員： 川端 保至(KAWABATA Yasushi)

【授業の紹介】

近年、わが国企業の多角化、国際化並びにわが国を取り巻く経済環境の変化により、会計ビッグバンといわれるほど、会計基準の新設・改訂が相次ぎディスクロージャー制度の充実・改善が精力的に進められてきた。このような会計制度改革に伴って生じる新しい会計問題である金融商品会計、退職給付会計、リース会計等を取り上げ、個別的に検討する。

【到達目標】

複雑かつ多種多様な新しい会計基準について、具体的設例を多く用いて、その内容を理解し、応用できる。

【授業計画】

第1回	税効果会計
第2回	有価証券会計
第3回	外貨換算会計
第4回	デリバティブ取引
第5回	有形固定資産会計
第6回	減損会計
第7回	リース会計
第8回	研究開発費会計
第9回	繰延資産会計
第10回	引当金会計
第11回	退職給付会計
第12回	社債会計
第13回	純資産会計
第14回	企業結合会計
第15回	キャッシュ・フロー会計

定期試験は実施しない。

【授業時間外の学習】

事前に配布したプリント等から次回授業の範囲を提示するので、該当ページを読んでおくこと。

【成績の評価】

日常の研究活動（50％）とレポート（50％）による。レポートについては、その都度、結果を授業時に、講評し、フィードバックを行う。

【使用テキスト】

プリントを配布

【参考文献】

適宜紹介する。

科目名： 簿記原理特論

担当教員： 井原 理代(IHARA Michiyo)

【授業の紹介】

会計基準の国際的な調和化が進む今日、会計知識とその土台となる複式簿記を学ぶことは重要である。本講義では、14～15世紀に複式簿記が生成した過程に遡り、複式簿記の根本原理を学ぶ。その上で、複式簿記がヨーロッパそしてアメリカ、日本へと伝播すると共に、その理論が発展していく過程を追う。

【到達目標】

複式簿記の生成過程について説明できる。
複式簿記の伝播の過程を理解することができる。
歴史的な会計用語について説明することができる。

【授業計画】

- 第1回 「会計」の起源と複式簿記の誕生
- 第2回 フランスの簿記事情と会計規程の成立・展開
- 第3回 ドイツ式簿記とイタリア式簿記
- 第4回 ネーデルラント会計史の現代的意義
- 第5回 15～19世紀イギリスの簿記事情
- 第6回 アメリカへの複式簿記の移入と簿記理論の体系化
- 第7回 株式会社会計の起源
- 第8回 株式会社制度確立期の財務報告実務
- 第9回 株式会社と管理会計の生成
- 第10回 株式会社と会計専門職業
- 第11回 政府・自治体と公会計
- 第12回 会計理論の生成と展開
- 第13回 和式帳合と複式簿記の輸入
- 第14回 現代会計へのプロローグ
- 第15回 これまでの内容の確認と質疑応答

【授業時間外の学習】

事前に該当するテキストの章を読み、報告者は報告用の資料をまとめ、他の者は質問内容を検討しておくこと。

【成績の評価】

報告（60％）、質疑（40％）を踏まえ、総合的に評価する。

【使用テキスト】

中野常男・清水泰洋編著『近代会計史入門』同文館出版、2014年（3,672円（税込））

【参考文献】

- 三光寺由実子著『中世フランス会計史 - 13-14世紀会計帳簿の実証的研究 - 』同文館出版、2011年（4,644円（税込））
- 中野常男著『会計理論生成史』中央経済社、1992年（6,501円（税込））
- 中野常男編著『複式簿記の構造と機能—過去・現代・未来—』同文館出版、2007年（6,264円（税込））
- 平林喜博編著『近代会計成立史』同文館出版、2005年（3,456円（税込））
- 渡邊泉著『歴史から学ぶ会計』同文館出版、2008年（3,240円（税込））

科目名： 監査特論

担当教員： 井上 善弘(INOUE Yoshihiro)

【授業の紹介】

監査論の主要な研究領域である財務諸表監査について、そこにおける基礎的概念と方法論を説明する。財務諸表監査は、企業が公表する財務諸表の信頼性を独立した第三者の立場から保証することをその任務とするものであり、現代の経済社会における重要なインフラストラクチャーのひとつと考えられている。本授業を履修することで、会計学の主要領域の一つである監査論の知識・技法を修得する。また、このような会計学に関する専門的知識の修得を通して、組織においてその知識を適切に活用することができるようになるとともに、より広く、課題に気付いて解決する力や社会に貢献できる力を身に付けることができる。

【到達目標】

- 1 財務諸表監査がどのような基礎的概念と方法論を用いて実施されているかを説明することができる。
- 2 財務諸表監査が現代の経済社会で果たしている役割について説明することができる。

【授業計画】

- 第1回 監査とは
 - 第2回 財務諸表監査の意義
 - 第3回 財務諸表監査の必要性
 - 第4回 監査人
 - 第5回 監査プロセスの全体像（1）適正性命題とアサーション
 - 第6回 監査プロセスの全体像（2）監査要点の意義
 - 第7回 監査証拠（1）～監査証拠の意義
 - 第8回 監査証拠（2）～監査証拠の分類方法～
 - 第9回 監査手続（1）～一般監査手続～
 - 第10回 監査手続（2）～個別監査手続～
 - 第11回 内部統制
 - 第12回 試査とその理論的根拠
 - 第13回 監査報告書（1）～標準監査報告書～
 - 第14回 監査報告書（2）～監査意見の移行形態～
 - 第15回 講義全体の総括と整理
- 定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

第1～4回、第5～10回、第11回～14回の授業内容に関するレポートの提出（3回）を求める。

【成績の評価】

授業における質疑・応答、議論への参加（40%）とレポート（60%）による。レポートは添削のうえ、授業時に返却する。

【使用テキスト】

長吉・北山・伊藤・井上・岸・異島『監査論入門（第3版）』中央経済社、2016年。事前に購入すること（購入必須）

【参考文献】

科目名： 経済学特論

担当教員： 宮崎 浩一(MIYAZAKI Koichi)

【授業の紹介】

この講義の目的は、経済学の基礎を学ぶことにより、現実の経済現象に対する経済学的な見方を身につけることである。特に、国民所得、経済成長、失業、金融システムといったマクロ経済を見る上で必要な経済学的なものの見方を身につけることに重点を置く。

【到達目標】

- ・経済学的な考え方の基礎を習得することができる。
- ・論理的思考力や文章による表現力を向上することができる。
- ・日々の新聞記事や経済ニュースを理解し、自分の頭で経済学的に考えることができる。

【授業計画】

以下、講義の予定です。ただし、進度によって変更の可能性もあります。

- 第1回：経済学の十大原理
 - 第2回：経済学者らしく考える
 - 第3回：相互依存と交易からの利益
 - 第4回：国民所得の測定（1）国内総生産の測定
 - 第5回：国民所得の測定（2）GDPは経済厚生のよい尺度か
 - 第6回：生計費の測定（1）消費者物価指数
 - 第7回：生計費の測定（2）インフレーションの影響に対する経済変数の補正
 - 第8回：これまでの授業のまとめと中間試験
 - 第9回：生産と成長（1）生産性の役割と決定要因
 - 第10回：生産と成長（2）経済成長と公共政策
 - 第11回：失業
 - 第12回：貯蓄、投資と金融システム（1）国民所得勘定における貯蓄と投資
 - 第13回：貯蓄、投資と金融システム（2）貸付資金市場
 - 第14回：総需要と総供給（1）短期の経済変動の説明
 - 第15回：総需要と総供給（2）経済変動の二つの原因
- 「定期試験」

【授業時間外の学習】

- ・復讐のための宿題を課す予定です。
- ・授業内容は連続しているので、欠席すると理解できなくなることを心にとめておいてください。

【成績の評価】

- 宿題：20%
- 中間試験：40%
- 定期試験：40%

【使用テキスト】

なし

【参考文献】

N. グレゴリー・マンキュー（2014）「マンキュー入門経済学（第2版）」東洋経済新報社

科目名： 地域経済特論

担当教員： 正岡 利朗(MASAOKA Toshiro)

【授業の紹介】

地域経済学の主要なテーマのひとつである「人口移動」の理論と実証について講述します。本講義では、まず、地域と人口についてのイメージを深めた上で、人口移動によって引き起こされるさまざまな地域問題を取り上げます。続いて、わが国における地域間人口移動の現況及びその要因について、とくに地域政策の視点より言及し、あわせて、その基本的な分析手法について解説を行います。これにより、学位授与の方針のうち、「1. 経営学に関連する優れた専門知識」の修得をめざします。

【到達目標】

1. 経営学の研究を遂行する上で、身につけておきたい地域経済についての理論及び知っておいた方がよい各種の地域経済情報を整理して理解することができる。
2. 現実のデータを扱い、実証分析を行うことができる。
3. 理論と実証の両方をバランスよく身につけられるようになる。

【授業計画】

- 第1回 ガイダンス
 - 第2回 地域と人口について
 - 第3回 地域について
 - 第4回 地域問題について
 - 第5回 地域政策と人口移動（国レベルの地域政策）
 - 第6回 同上（地方自治体レベルの地域政策）
 - 第7回 人口移動の構造（「地域」を中心とした分類）
 - 第8回 同上（「移動の主体」を中心とした分類）
 - 第9回 人口移動の理論（プル・プッシュ理論）
 - 第10回 同上（プル・プッシュ理論の再検討）
 - 第11回 人口移動の統計資料
 - 第12回 人口移動の分析手法（総論）
 - 第13回 同上（手法についての実習）
 - 第14回 今後の人口移動について
 - 第15回 これまでの授業のまとめ（学習した重点項目の確認）と質疑応答
- 定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

よいレポート内容をまとめるには、相当な時間外の学習が必須となります。さまざまな意見を総合して、自分の意見をまとめるための参考にするという態度を、時間をかけてぜひ身につけてください。毎回の授業開始前には、プリント等を復習し、疑問点、気づいたことをメモ等にまとめておいてください（2時間）。また、毎回の授業毎にA4・1枚程度の内容要約を行って記録しておいてください（2時間）。オフィスアワーを設定しているので、掲示等で日時を確認の上、質問に来てください。

【成績の評価】

レポート提出（100％）の結果により判断します。ただし、授業態度が不適切な場合はそれに応じた減点をしますので留意してください。なお、各受講生のレポートの結果については講評し、フィードバックを行います。

【使用テキスト】

とくにありません。

【参考文献】

大友篤『地域分析入門』東洋経済新報社、1997年。（¥3,456）

科目名： 地域政策特論

担当教員： 井原 健雄(IHARA Takeo)

【授業の紹介】

本科目の目的は、「地域政策」(Regional Policy)についての基礎的な理解を深めることに加えて、その実践的な応用能力を習得するための有効な方法と考えられる「地域産業連関分析」に着目して、その基礎的な理解と応用能力の向上が図れるようにすることである。

そこで、本科目で取り上げられる各講義での論及事項に着目すれば、つぎの3部から構成されている。その第1部は、「地域政策」とは何かについて、その理解を深めて貰うことである。ついで、その第2部では、かかる「地域政策」の有効な分析手法として「地域産業連関分析」に着目して、そのより詳細な理解を深めて貰うことである。そして、最後の第3部では、その応用事例として、「地域産業連関分析」に関わる個別具体的な「適用事例」に着目して、その有効範囲と限界を解明することである。

したがって、本科目は学位授与の基本方針との結び付きとして、「企業や自治体、NPOの組織で高度な課題に答えられる能力」の育成に関わる。

【到達目標】

1. 基礎的な諸概念(例えば、「地域」や「政策」など)に対する真の理解と認識を深めることができる。
2. その有効かつ的確な伝達方法(例えば、「言葉による伝達」や「図式化による伝達」、さらに「数理的な伝達」)の習得が可能となる。

【授業計画】

- 第1回 開題(「はじめに言葉ありき!」)
 - 第2回 「地域」(Region)とは何か?
 - 第3回 「政策」(Policy)とは何か?
 - 第4回 「地域政策」(Regional Policy)の吟味検証
 - 第5回 「地域科学」(Regional Science)との比較検討
 - 第6回 「産業構造」と「産業組織(論)」の違い
 - 第7回 「地域産業連関分析」とは何か?
 - 第8回 「産業連関分析」(Input-Output Analysis)の概要
 - 第9回 「産業連関分析」(Input-Output Analysis)の限界
 - 第10回 「産業連関分析」(Input-Output Analysis)の拡充
 - 第11回 「産業連関分析」(Input-Output Analysis)の適用事例
 - 第12回 平成17(2005)年「産業連関表—総務省」の概要説明
 - 第13回 平成23(2011)年「香川県産業連関表」などの概要説明
 - 第14回 47都道府県間接続産業連関表の作成と分析の概要説明
 - 第15回 改めて、「地域活性化」や「地方創生」などの意義を問う?
- 定期試験は実施しない。

【授業時間外の学習】

授業の復習のために、適宜課題のプリントを配布し、提出を求める。

【成績の評価】

授業への貢献状況(議論における質疑応答)(30%)、授業時の各自担当レポート(30%)、期末レポート(40%)を総合して評価する。なお、レポートについては、授業時に講評を行う。

【使用テキスト】

順次、講義資料を配布する。

【参考文献】

授業の進捗に応じて、適宜、指示する。

科目名： データ分析特論

担当教員： 大藪 和雄(OHYABU Kazuo)

【授業の紹介】

この授業は、実務経験のある教員による授業科目です。

経営環境としての産業データ、経済データをEXCELで分析する。たとえば、第4回のアンケート調査の集計と分析では、香川県中小企業家同友会（11年前）のアンケート調査について、集計方法と分析方法について理解し、解説例を示す。他の回でも、できる限り実際の経済・産業データを利用する。企業の財務データなども利用して経営分析の理解が深まるし、各自の修士論文でも、言葉だけでなく、実証的統計の裏付けができ、最適なグラフの作成もでき、論述も確かなものとなるであろう。また、地域データの分析方法も理解することにより、地域の諸課題を解決できる人材が育つことになるであろう。

【到達目標】

1. 統計データをいろいろなグラフで表現できる。
2. 各種データ比較のため標準化手法を用いることができる。
3. 具体例によるアンケート調査の集計方法とその結果の要約ができる。
4. コホート変化率・婦人子供比を利用し地域の人口推計ができる。
5. 特化係数・寄与度などを利用し地域の特徴を把握できる。

【授業計画】

- 第1回 寄与度・寄与率分析
 - 第2回 標準化と経済指数
 - 第3回 特化係数の利用
 - 第4回 アンケート調査の集計と分析
 - 第5回 カイ2乗検定の方法
 - 第6回 人口予測の方法
 - 第7回 商業統計の分析
 - 第8回 工業統計の分析
 - 第9回 各種グラフ（人口ピラミッド）
 - 第10回 各種グラフ（3分割データのグラフ）
 - 第11回 産業連関分析の考え
 - 第12回 産業連関分析の実例
 - 第14回 地域分析の方法
 - 第15回 レポート作成要領（年度により、テーマは異なる）
- 定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

前もって配付する（2回目から）資料により、用語、EXCELの関数など調べておく（1時間）。
毎行行った小レポートに類する問題を12回指定する（1問につき2時間）。
各人で、授業でやったことを文章にまとめる（0.5時間）。
それを必ずやってほしい。自分で分析する力を養うには練習が必要である。
いろいろな工夫を試みてほしい。自分で工夫できるのが大学院生である。
試験はおこなわないが、3回ほど中レポートを作成提出してもらう（1回5時間）。
（おおよその時間を推定したが、各人異なって良い）

【成績の評価】

復習のレポート（65%）と中レポート（35%）
復習レポートは、添削と評価の上、そのつぎの回にフィードバックする。
中レポートは、添削と評価の上、メールでフィードバックする。

【使用テキスト】

毎回プリントを配布する。

【参考文献】

半沢誠司・武者忠彦「地域分析ハンドブック」ナカニシヤ出版、2015年6月。
宮沢健一「産業連関分析入門」日本経済新聞社（7版）
他は、その都度示す。

科目名： 統計学特論

担当教員： 大藪 和雄(OHYABU Kazuo)

【授業の紹介】

この授業は、実務経験のある教員による授業科目です。

統計データの分析法について、実際のデータを取り上げながら、EXCELを使って講義を進める。院生は理論だけでなく、統計分析法をより具体的に把握することができる。たとえば、第5・6回には、コンビニの企業データに基づき、ローレンツ曲線を描き、ジニー係数を計算し、H.D.インデックスを計算し、集中度の意味を考察する。いろいろなグラフによる表現方法を体得することにより、修士論文に自分なりのグラフを作ることができるであろう。日本の統計データなどについて検索力をつけることにより、インターネットでデータを探ることができるようになるであろう。また、微妙に異なっている統計表を適切に利用できる能力が身につくであろう。このことにより、企業や自治体に就職した場合、自分らしい統計分析ができるようになるであろうし、博士課程に進学する場合でも、基礎的な力を養うことができよう。

【到達目標】

1. 具体例により代表値・分散度の使い方を理解し、一般的な説明もできる。
2. 年齢調整死亡率・経済指数の背後の考え方である条件の異なる場面での比較の方法について理解でき、応用できる。
3. 具体的データの検索方法と目的に合致するようにデータを抽出する方法を理解し、応用できる。
4. データを分解して計算することによって変化の要因を理解し、他の分野にも応用できる。
5. 実際の問題について統計学の代表的な推定・検定の考え方を理解し、実際に応用できる。

【授業計画】

- | | |
|------|-------------------------|
| 第1回 | 平均・加重平均・移動平均 |
| 第2回 | 分散度の意味 |
| 第3回 | 年齢調整死亡率の意味 |
| 第4回 | 経済指数の理解 |
| 第5回 | ローレンツ曲線とジニー係数 |
| 第6回 | ハーフィンダール指数と集中度 |
| 第7回 | 相関分析 |
| 第8回 | 回帰分析・重回帰分析 |
| 第9回 | 2項分布・正規分布 |
| 第11回 | 推定 |
| 第12回 | 検定 |
| 第13回 | 時系列分析（時系列分析の古典的考え方） |
| 第14回 | 時系列分析（ロジスティック曲線のあてはめ） |
| 第15回 | レポートの作成方法（テーマは年度により異なる） |
- 定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

前もって配布する資料から、用語・EXCELの関数などについて各自調べておく（1時間）。授業中に解いた問題に近い問題を12回配布するが、それを自分で考えて解いてみる（1回2時間）。そのことにより理解が深まる。各回授業でやったことを文章にまとめる（1回0.5時間）。試験は行わないが、中レポートを3回提出してもらう（1回約5時間）。（時間配分は、各人異なってよい）

【成績の評価】

復習のレポート（55%）。中レポート（45%）。
復習問題は、次回にフィードバックする。中レポートは、メールによりフィードバックする。

【使用テキスト】

プリントを毎回配布する。統計学問題演習を配布する。

【参考文献】

前川功一編著「経済・経営系のためのよくわかる統計学」朝倉書房、2014年3月。
村上正康・安田正實共著「統計学演習」培風館、1989年1月。
その他は、その都度示す。

科目名： 外国文献研究

担当教員： ウィリアムズ R.T.(WILLIAMS R.T.)

【授業の紹介】

This course will require students to read an English book over the course of the semester and discuss the contents with the instructor. Attention will be paid to cultural norms and cultural differences between different cultures. The outline of the course will follow the main topics in the book. The class will use an active learning style. Students will be required to express themselves in English.

【到達目標】

The goal of this course is to study English that will be necessary in a working environment. Students will build their discussion skills and also learn cross-cultural communication and how to avoid and solve problems with other people in work and personal environments.

【授業計画】

第1回 Orientation and introduction to the material
第2回 Pt. 1 Chapters 1 and 2 How to deal with people
第3回 Pt. 1 Chapter 3 Working in a social environment
第4回 Pt. 2 Chapters 1 and 2 Making a good impression
第5回 Pt. 2 Chapters 3, 4, and 5 Interpersonal Communications
第6回 pt. 2 Chapter 6 Making and keeping friends and interpersonal relationships
第7回 Mid-term presentation on a topic of interest to each student
第8回 pt. 3 Chapters 1, 2 and 3 Argument and how to solve them
第9回 pt. 3 Chapters 4, 5 and 6 Dealing with complaints
第10回 pt. 3 Chapters 7 and 8 Cooperation in the work environment
第11回 pt. 3 Chapter 9 How to satisfy others and make them feel at ease
第12回 pt. 3 Chapter 10 Working to presuppose the needs of others
第13回 pt. 3 Chapters 11 and 12 Counselling
第14回 Test review and practice for final presentation
第15回 Final presentation
Final Evaluation

【授業時間外の学習】

Students will be required to read the textbook and prepare presentations for in-class discussion and discuss every week what they learned in the previous week for evaluation purposes

【成績の評価】

Class participation, mid-term and final presentations will be equally weighted for the final grade
students will be given Feedback after evaluations

【使用テキスト】

How to Win Friends and Influence People
Dale Carnegie

【参考文献】

科目名： 特別演習
担当教員： 井藤 正信(ITO Masanobu)

【授業の紹介】

修士論文の執筆について議論し、内容について報告してもらう。

学士授与方針（ディプロマ・ポリシー）に関連して、修士論文の内容に即した知識を修得して企業等の組織で活用することができる。

【到達目標】

学生が修士論文を完成させることができる。

学生が修士論文を完成させるための前提となる知識を修得することができる。

【授業計画】

学生と話し合って決める。

第1回 学生と話し合っ、修士論文の執筆に役立つテキストを決める。

第2回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第3回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第4回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第5回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第6回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第7回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第8回 これまでの発表を内容について教員が中間のまとめを行う。それに基づいてディスカッションを行う。

第9回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第10回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第11回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第12回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第13回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第14回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションなど、アクティブラーニングを行う。

第15回 まとめ。学生の発表内容について教員が総評を行う。

定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

予習としては、修士論文のテーマに即した専門書や論文等を探し、自分なりの見解が持てるようになるまで熟読することが望ましい。復習については、演習で得た知見を修士論文に活かせるように自分なりに整理し、要点をノートに書き留めることが望ましい。なお、質問等については毎週木曜日11時半から12時半までオフィスアワーを設定してるので、活用してほしい。

【成績の評価】

平常点で評価する。平常点80%。発表内容20%。

【使用テキスト】

学生と話し合って決める。

【参考文献】

修士論文に関係するテキストを読んでもらいたい。

科目名： 特別演習
担当教員： 井藤 正信(ITO Masanobu)

【授業の紹介】

修士論文の執筆について話し合い、内容について報告してもらい、内容をチェックし、修正箇所があれば、修正を命ずる。

学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）との関連では、修士論文を執筆したことによって、専門的な知見を得てそれを企業等の組織で活用することができる。

【到達目標】

学生が修士論文を完成をさせることによって、より経営に関する専門的知識を得ることができる。

学生が修士論文を完成させることによって、より深い洞察力を得ることができ、社会のあらゆる方面で活躍することができる

【授業計画】

学生と話し合って修士論文に関するテキストを読む。同時に修士論文の発表を学生が行い、それに対して指導教員が論評を行う。

第1回 学生と話し合って、修士論文の執筆に役立つテキストを決める。

第2回 学生がテキストを報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第3回 学生が修士論文を報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第4回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第5回 学生が修士論文を報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第6回 学生が報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第7回 学生が修士論文を報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第8回 これまでの発表を内容について教員が中間のまとめを行う。それに基づいてディスカッションを行う。

第9回 学生が修士論文を報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第10回 学生が修士論文を報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第11回 学生が修士論文を報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第12回 学生が修士論文を報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第13回 学生が修士論文を報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第14回 学生が修士論文を報告し、それに基づいてディスカッションを行う。

第15回 まとめ。学生の修士論文の発表内容について教員が総評を行う。

定期試験は実施しない

【授業時間外の学習】

予習としては、修士論文のテーマに即した専門書や論文等を探し、自分なりの見解が持てるようになるまで熟読することが望ましい。復習については、演習で得た知見を修士論文に活かせるように自分なりに整理し、要点をノートに書き留めることが望ましい。なお、質問等については毎週木曜日11時半から12時半までオフィスアワーを設定してるので、活用してほしい。

【成績の評価】

平常点で評価する。平常点（発表内容）20%。修士論文の評価80%。

【使用テキスト】

履修者と話し合って決める。

【参考文献】

修士論文に関係するテキストを読んでもらいたい。